



椎野若菜・的場澄人編『女も男もフィールドへ (FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ 第12巻)』古今書院, 2016年, 225頁, 3,200円+税, ISBN 978-4-7722-7133-2

林 紀代美*

本書は、本書編者の一人である椎野若菜氏が立ち上げたフィールドワークを手法とする研究者が分野を超えて集うNPO法人「FENICS」(互いの経験や知識・技能を学び、発信する場づくりをしている法人)が、自他の活動の研鑽や後進育成に資する情報発信を試みた「100万人のフィールドワーカーシリーズ」に収録されている1冊である。シリーズ他巻でも地理関係の執筆者がみられるので、興味を持たれた方は手に取っていただければと思う。本書の執筆者は文化人類学やアフリカ研究、自然環境科学など学際的な布陣となっているので、目次や執筆者一覧だけみると地理学とは縁遠い印象を抱くかもしれない。しかし、若干のスタイルの違いはあれど、研究上重要な手法が共通する他分野から学ぶことができる部分や刺激を受ける面は多いだろう。

本書の構成は、3つの柱と、若手・女性研究者支援制度の紹介、フィールドワーカーのキャリアアップと子育て・介護の両立に注目したアンケート結果の紹介で構成されている。3つの柱は、「フィールドワーカーのジェンダー」(フィールドで「ヨメサン・ムスメ」となるためのスイッチ/雪水女子の誕生/自分を守りつつ調査する/「ゲイ・コミュニティ」でフィールドワークする/女も男も無意識の思い込みに気づくために)、「子連れフィールドワーカー」(子どもを連れてボルネオ島の熱帯雨林へ/ベビーをつれてアフリカへ/子連れフィールドワーク/家族とフィールドワーク/嫁さんマイル)、「ライフイベントとフィールドワーカー」(フィールドワークに行けないフィールドワーカー/響きあう家族のかたち/カップルでのフィールドワーク/子持ちのフィールドワーカーと子育てするフィールドワーカー)である。各章・コラムの情報は、研究内容の紹介も含まれるが、主として研究者としての自分と生活人としての自分との往来や性差などを切

り口として、研究者の立ち位置、活動の展開とその難しさ、就業過程などを語るものからなる。キャラクターや立ち位置の異なる研究者が、実体験や魅力、悩み、工夫、想いを具体的に語ることで、若い世代にフィールドワーカーへの道を誘っている。

評者(とパートナー)も、幼児とともにフィールドに出かける研究者である。本書を手に取り、人生の各段階でイベントに直面した当時や現在、自分たちも考え感じた課題、試行錯誤していることなども改めて思い起こされた。ちょうど先日、母校から学部生向けのキャリア形成授業への出講依頼があった。自分の道のりを振り返り、フィールド研究や地理学の楽しさ、社会とつながる意義などを後輩に伝えるよう心掛けて話をした。このような情報と接する場があることで、職業選択の多様性や転職・難局でのレジリエンス力の大切さに関心を寄せることができた学生も見受けられた。またある学会の大会で開催された、研究者のキャリア形成や男女共同参画、子育て支援を扱う企画をのぞいた。しかし参加者数は少なく、男女比・年齢層は偏っていた。このようなこともあって、共感しながら本書を一気に読破させていただいた。

本書は、学会誌の書評になじまないという人もあるかもしれない。しかし、男女・年齢問わず活躍でき、その人らしく生き活きと研究できる環境を整えることが、長期的には学界や社会の発展に資する。だからこそ、研究に関わる人に本書を紹介したい。研究への方法や魅力を先輩が後輩に紹介する企画は、近年徐々に増えている。しかし、研究者の日常生活や就職にみられる苦労や工夫を共有できる道具や場はまだ少ない。個々の研究者の背中には、それぞれ違った生活や人生がある。それを携えて研究をし、成果が発信される。研究者も一生活人、人生の旅人である。研究だけを考えていても、万事うまくいくわけではない。だが、生活感やその人らしさは、論文から十分知ることができない。本書の話題提供はこの点で斬新な切り口、かつ重要な存在である。

周囲に多様な研究テーマ、人生経験、キャリアを持つ先輩や教員が数多く存在する大規模大学・研究者養成大学であれば、彼らの姿に触れることで後進も将来を思い描いたり、心配して備えたりもできる面はある。しかし、皆がそのような環境で学んでいるわけではない。必ずしも自分の生活条件や性別、研究分野・テ-